

パネル発表「地域との連携を生かしたザリガニの飼育」

鈴木なつ美* 田宮 縁**



1 はじめに

本単元のねらいは、子どもが、ザリガニの飼育を通して、自分が世話をするのがザリガニの生命を守ることにつながることに気づき、生き物を大切にしたり、相手の立場に立って考え、行動したりする大切さを実感することである。

方法としては、静岡ガスと連携し、自分の作った釣り竿と考えたエサで、ザリガニ釣りを行った。ザリガニ釣りで捕まえたザリガニをどうするか話し合い、教室で一人一匹大切に世話することにした。

2 単元を通した子どもの変容

9/3	教師のザリガニとの出会い ・かわいい・触りたい ・ザリガニ釣りをやってみたい	ザリガニへの 興味関心が高まる
9/8	竿作り ・楽しみ・エサは何にしよう？	
9/12	ザリガニ釣り(自分のザリガニとの出会い) ・やった！釣れた・名前をつけたよ ・飼って大切に世話したい！！	

9/12	一人一匹お世話スタート ・どんな世話をしあげたらいいの？	自分が考えた世話をしたい (自分本位の見方・考え方) 成長や変化に関する気づき・自分のかかわりに対する気づき
9/16	初めてザリガニの脱皮を見る ・死んじゃった？食べられちゃった？ ・殻を脱いで大きくなるなんて、自分の脱いだ殻を食べるなんて、ビックリ！！	
9/22	ザリちゃんが死んじゃった ・大切にお世話していたのに何で？ ・悲しい・寂しい・お世話って難しいよ	
9/25	メスザリガニが卵を抱えているのを発見 ・水換えしないで、そっとしあげよう ・無事に赤ちゃんが生まれるといいな	

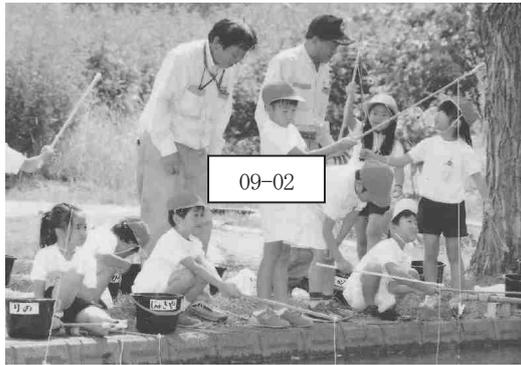
日々の世話の中での様々な気づきを得る

10/2	ザリちゃん脱走 ・広いところがいいの？家族のところへ帰りたいの？自然の方がいいの？	(相手の立場に立った見方や考え方)
10/16	自分のザリちゃん紹介 ・仲良くなったよ・世話を続けてきたよ ・私はザリちゃんのお母さん ・命を預かっているんだよ ・これからも大切にお世話していくよ	
10/21	冬、自然の中では、 ザリちゃんが冬眠することを知る ・今までと同じお世話でいいのかな？ ・教室で冬眠させようか、でも心配 ・温かい家で世話を続けようか	ザリちゃんにとっていいのは？ (相手の立場に立った見方や考え方)
10/23	ザリちゃんを自然に帰してあげたい ・そんなの寂しい。ずっと一緒にいたい ・ザリちゃんには、生命があるんだよ ・自然の方が生きやすいよ ・ザリちゃんにとっていいのは？	
10/31	ザリちゃんのための決断をしたよ ・ザリちゃんは私の物じゃない。自然に帰してあげるよ。 ・敵や自然の厳しさから守って、家で大切にお世話するよ。	気付き 生命をもっていることへの
11/21	ザリちゃんのお別れ会 (ビオトープに帰しに行く) ・ありがとう。ずっと忘れないよ。 ・無事に冬を越してね。元気だね。	

(1)ザリガニとの出会い～静岡ガスとの連携～

どの子も「ザリガニを飼いたい」という思いをもつことができるようなザリガニとの出会いにするために、自分で作った釣り竿をもってザリガニ釣りに行くことにした。そこで、たくさんのザリガニがいるビオトープをもつ静岡ガスにお願いし、ザリガニ釣りをさせていただくことにした。静岡ガスでは、自然観察教室やエコ

クッキング教室などを開き、地域への環境教育に取り組んでいる。今回のお願いにも快く協力していただき、ビオトープで釣りをさせていただくことになった。また、ザリガニ釣り当日には、5名の職員の方が、釣るためのアドバイスを下さったり安全を見守ったりして下さった。



目の前でザリガニに逃げられてしまったりエサだけ食べられてしまったりと、最初はなかなか釣れずに悔しい思いをしていた子どもも、慣れてくるとコツがわかってきたり友達が上手に釣る様子を見て真似たりして、ザリガニが釣れた喜びを味わうことができた。学校までの帰り道、子どもたちの話題は、ザリガニにつけてあげたい名前やこれからしてあげたいことなど、ザリガニ一色だった。どの子にも、「自分の釣ったザリガニを飼いたい」「大切に世話してあげたい」という思いが生まれていた。

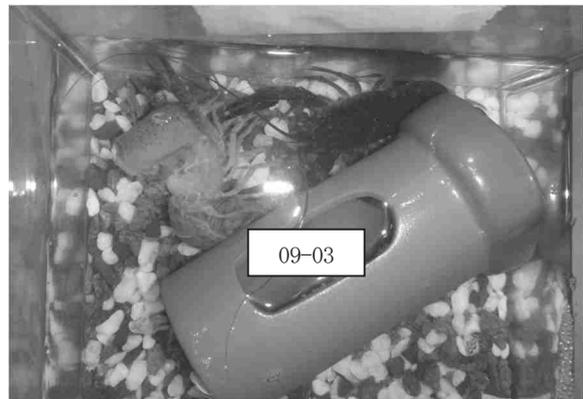
(2) 成長や変化に関する気付き

～秋にザリガニの飼育をするよさ～

9月12日のザリガニ釣り。「すごい！お腹とお腹でくっついているよ。」「これって、交尾じゃない？」「交尾って何？」「結婚したってことだよ。」「へえ～、すごいね。」釣りをしている最中に、バケツの中の2匹のザリガニが交尾したところを見ることができた。

1人1容器で飼い始めてすぐに、1匹のザリガニが脱皮をした。脱皮した抜け殻を見た子どもは、「先生、○さんのザリガニが死んじゃった。」「違うよ。誰かのザリガニが○さんのザリガニに食べられちゃったんだよ。」と、朝から大騒ぎだった。しかし、誰のザリガニもいな

くなっていないことがわかった。「これって、脱皮じゃない？」と虫博士の子どもが言い出した。図鑑や本で脱皮のことを知っている子どもももいたが、実際にザリガニの脱皮を見たのはどの子も初めてだった。ザリガニが殻を脱いで大きくなること、抜け殻があまりにきれいなことにも驚いていたが、もっと驚いたのはザリガニが自分の抜け殻を食べたことだった。その後1か月、毎日のようにザリガニの脱皮が教室で見られ、多くの子のザリガニが脱皮をした。また、残念ながら無精卵だったが、1匹メスザリガニが産卵しお腹に卵を抱えた姿も見ることができた。飼育している間に、子どもが経験したのは、驚きや喜びだけではなく、大切に世話していたにも関わらず、脱皮の失敗でザリガニが死んでしまった子は、悲しさと寂しさで涙が止まらず、そのザリガニのお墓からなかなか離れることができなかった。また、飼い始めた頃はまだ暑い日が続いていたことや世話に慣れていなかったことから、エサをあげ過ぎてその食べ残しが腐り、水が汚れて死んでしまったザリガニもいた。「お世話していたのに・・・」という悲しく悔しい思いが、「なぜ死んでしまったのか？」と本や図鑑で調べる原動力になった。世話したことによって得た気付きや本や図鑑から得た気付きを対話し共有することで、子どもは世話の仕方を変えていった。



また、日に日に涼しくなり、ザリガニの世話はしやすくなっていったが、10月中旬を過ぎると朝夕は寒さを感じるようになった。そうした季節の変化をきっかけに、「これから冬に

向けてどんどん寒くなっていくけれど、世話はこれまでと同じでいいのかな？」と、考えていくことができた。ザリガニの交尾、脱皮、産卵を見ることができたり、季節に合わせた世話を考えることができたりしたのは、秋にザリガニを飼育するよさではないかと考える。



(3) 生命をもっていることへの気付き

～「ザリちゃんには、生命があるんだよ！」～

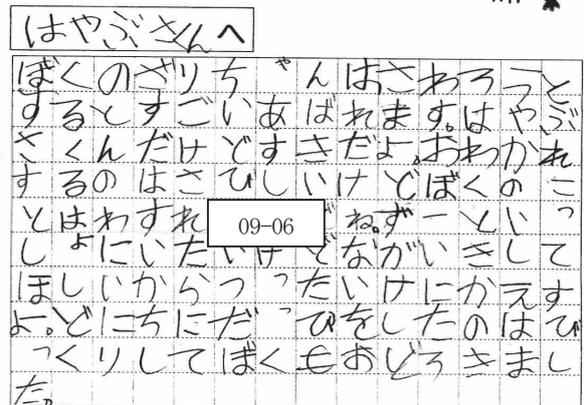
ザリガニが寒い冬が苦手な、自然の中では冬眠することを知った子どもは、冬になったら教室の水槽の中ではこれまでと同じ世話で飼っていけないことに気付いた。これまで世話を続けてきた子どもは、「ザリちゃんは大切な友達」

「自分はザリちゃんのお母さん」と思うほど、自分のザリガニに愛着をもち、ザリガニの気持ちを自分なりに考えながら世話するようになっていた。そんな中で、「ザリちゃんは、狭い水槽の中よりもビオトープのような広いところがいいのではないか」「家族や仲間と離ればなれになってしまって寂しいのではないか」「やっぱり自然の中の方が暮らしやすいのではないか」などと考え始めてきていた子どもから、「自然の中に帰してあげたい。」と声が上がった。

「どうしてザリちゃんを自然に帰すの?」「ザリちゃんを帰すなんて寂しいから絶対に嫌!」

「責任をもって大切にお世話してあげるって決めたんじゃなかったの?」と反対する子どもも多い中で、ある子が発言した。「ザリちゃんのこと大好きだから、私も本当は一緒にいたいよ。でも、自然の中みたいに冬眠ができなくて、ザリちゃん

が死んじゃうかもしれない。ザリちゃんには生命があるんだよ。私はザリちゃんの生命を預かっているから、ザリちゃんに元気で長生きしてほしい。だから、自然に帰してあげたい」という発言に、何人かの子が「ザリちゃんの生命を守りたいから自然に帰してあげたい」と発言を続けた。すると、少しずつ自分の考えていたことが、本当にザリちゃんのためなのか立ち止まって考える子どもが出てきた。中には、「だけど自然の中にも敵がいるし、冬の寒さは厳しいから家に連れて帰って、温かい部屋で今までと同じ世話をしてあげることがザリちゃんのため」や「ザリちゃんも私と一緒にいたいと思っている。ザリちゃんの生命は人間よりも短いから死んでしまうこともあるかもしれない。だけど、最後まで飼って大切にお世話を続けてあげることがザリちゃんのため」と考える子もいた。しかし、自然に帰すと考えた子も、このまま世



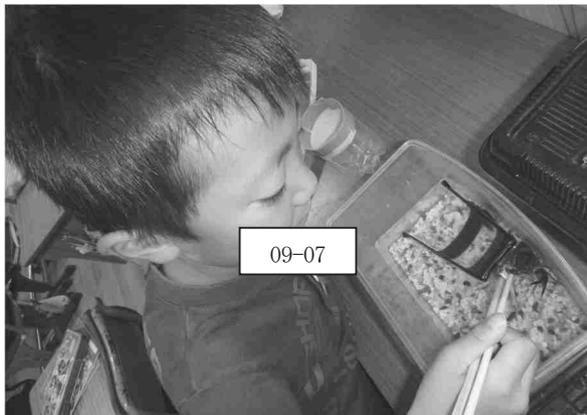
話を続けると考えた子も、どの子もザリちゃんの生命をどう守ることができるかを考えていた。

これは、自然に帰すと決断したK男が、自分のザリガニに宛てて書いた手紙である。最初は「離れたくないから飼いつづけて」と考えていたK男が、最終的には自然に帰す決断をした。自然に帰した後、「これで、はやぶさ君は長生きできるね。」と、自分の決断に自信をもっているK男の姿が見られた。

4) 一人ひとり飼うことのよさ

今回、本校の生活科部では、1年生でザリガ

ニ、2年生でモルモットの飼育を行った。1年生は丈夫な生き物を一人一匹飼育し、2年生は繊細な哺乳類をグループで飼育することが発達段階に適していると考えたからだ。最初に単元を構想したとき、子どもは慣れてくると世話を忘れたり面倒になったりするだろうと考えていた。しかし、実際には「エサを食べてくれた」「隠れ家が気に入ったみたい」と、自分の世話にザリガニが見せる反応がうれしくて、子どもはますますお世話に力を入れていった。また、あまり動きが見られない日には「どうしたのかな？」と心配し、休み時間のたびに見に行く姿が見られた。こうした姿が見られたのは、一人一匹飼ったことで「自分のザリガニ」という意識が持てたからだと考える。



4. おわりに ～連携の中での単元構想～

この単元を実践するにあたり、第二筆者から紹介してもらった静岡市立安東幼保園の鈴木富美子教頭から、前任園の東豊田幼稚園の親子でのザリガニ釣りの実践について教えていただき、単元の一部に取り入れた。また、静岡ガス様には、お忙しい中、多くのスタッフに協力をいただき、ザリガニ釣りを行うことができた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

本校の研究協議会、また本研究集会で実践を発表することで、学校が地域、企業との確かな互恵関係を築き、実践を豊かなものとしていくと考えている。



付記

本実践で飼育した「ザリガニ」は「アメリカザリガニ」である。「アメリカザリガニ」は、「特定外来生物」ではないものの「未判定外来生物」に指定されており、生態系への悪影響を及ぼす可能性があるため適切な理解と取扱いを要する生物である。しかし、生活科新設当初より、ザリガニの飼育は多くの学校でなされてきた。現行の『学習指導要領解説 生活編』でも、「地域の自然環境や生態系の破壊につながらないように、外来生物等の取扱いには十分配慮しなければならない」（文部科学省、2008、p.36）と明記されているが、その具体的な方法は述べられていない。

本実践では、1人1匹ずつ飼育することで、繁殖をさせないことに配慮した。また、単元終了時には、自宅で飼育を継続する児童には、『学習指導要領解説 生活編』に述べられている配慮事項を各家庭に伝え、生態系について親子で考える機会をつくった。企業に返却したザリガニは、セキュリティの厳格な企業構内のビオトープから外部に流出することは考えがたい。企業との連携により、適切な配慮のもと実践された飼育活動である。

(*静岡大学教育学部附属静岡小学校)

(**静岡大学)